

吉野宮瀧遺跡と吉野宮

みやたき

奈良芸術短期大学 教授

前園 実知雄

はじめに

古墳時代から飛鳥・奈良時代を通じて政権の中枢のあった大和は、いわゆる青垣山と呼ばれる山並みに囲まれた盆地である。その中の南の一角を担っているのが、竜門岳から西に延びる山塊である。時代を超えて都の人達が神仙境としてあこがれの想いを抱いていた吉野の山々はそこから直接望むことは出来ない。飛鳥時代、斉明天皇が宮を造り、大海人皇子が壬申の乱の策を練り、天武天皇に即位した後「吉野の盟」^{ちかい}を行い、持統天皇が足しげく通った吉野宮は、この都からさほど遠くではないけれど、直接目にする事ができない奥深い吉野の山々の入り口部分に位置していることに、私は強い関心を抱いている。

古代の人達の吉野に対する思いは、彼らの残した『万葉集』や『懷風藻』^{かいふうそう}といった歌集の中に見られるが、その思想は時代が下った鎌倉時代、南北朝時代の権力者、それも再起を願う人達の間にも強く残っていたであろうことは、多くの歴史が語っている。

本稿では、彼らの残した吉野宮の遺跡の可能性が強い宮瀧遺跡を中心に、文献史料、研究史、発掘調査の成果を追いながら、吉野の持つ意味について考えてみたい。

一 「宮瀧」の名の由来とその歴史

紀伊半島の奥深い山間部にその源流をもつ吉野川は北流し、やがて中央構造線の谷間に沿って、吉野の山塊の北側を西に流れ、紀ノ川と名を変え紀伊水道に注ぐ大河であ

る。この流域には風光明媚なところが数多いが、なかでも際立っているのが、五条市の栄山寺の南を流れるところと、この吉野町の宮瀧である。

栄山寺は言うまでもなく、もとは前山寺^{さきやま}と称した奈良時代に建立された寺院で、藤原^{ふじ}武智麻呂^{むちまろ}との関係が深い。おそらく藤原南家の貴族たちはこの景勝の地を選んで別業を営んだのであろう。

いっぽう宮瀧はさらにその上流にあり、水煙を立てる淵、蒼い水面と奇岩の並ぶ光景は、周囲の緑深い山容と相まって神仙境と形容するにふさわしい光景を醸し出している。

「宮瀧」というこの優美な名称がいつの頃から用いられるようになったかは定かではない。『万葉集』巻一の三十六は、持

統天皇の吉野宮行幸に伴った柿本人麻呂の歌である。

やすみしし わご大君の 聞し食す
天の下に 国はしも 多にはあれども
山川の 清き河内と 御心を 吉野の
国の 花散らふ 秋津の野辺に 宮柱
太敷きませば 百磯城の 大宮人は
船並めて 浅川渡り 船競ひ 夕川渡る
この川の 絶ゆることなく この山の



宮瀧の景観

いや高知らす 水激つ 瀧の宮処は
見れど飽かぬかも

この中の「瀧の宮処」から「宮瀧」の名
称が生まれたとの見方を支持すれば、飛鳥
時代から奈良時代にはすでに成立していた
可能性はある。

ただそれはあくまでも間接的であり、実
際に「宮瀧」が歴史書に登場するのは、平
安時代前期の昌泰元年（八九八）に宇多上
皇が宮瀧に行幸された記事で、『日本紀略』
（平安時代中期以降成立）、『扶桑略記』（平
安時代後期成立）、『帝王編年記』（室町時
代成立）などにその行幸の行程が詳しく記
されている。中でも内容の詳しい『扶桑略
記』からその旅程をたどってみよう。

昌泰元年十月二十一日、宇多上皇は鷹狩
りのため常陸太守是貞親王、権大納言右大
将菅原道真、参議勘解由長官源昇ら
数十人を連れて宮瀧に向かうことを決め、
二十三日早朝京を発った。途中で奈良の法
華寺に参詣し、その夜は高市郡にある菅原
道真の山荘に宿泊した。翌二十四日は、吉
野の現光寺（比叡寺）に参り、吉野郡院を
宿とした。明けて二十五日は一行で宮瀧を
訪れ、上皇は吉野川の美しさを「瀧は急流

積雪を崩すがごとく、愛賞を徘徊して景の
傾くを知らず」と称え、伴った人たちに和
歌を献じさせている。その後、一行は竜門
寺を訪ねた後、大坂の住吉浜を回って京に
帰ったようだ。

この行程からみて、一行の最も重要な目
的は、宮瀧行幸であったことが考えられよ
う。

平安時代の中期の源頼常の日記『左経
記』の中にも、万寿二年（一〇二五）十一
月のこととして、宮瀧訪問が見える。また
平安時代後期の歌人西行の『山家集』にも
宮瀧を詠んだ次の歌が収められている。

瀬をはやみ宮瀧川を渡り行ば 心の
底の澄む心地する

鎌倉時代の建長六年（一二五四）、橋成
季の著わした『古今著聞集』は、古代王朝
への憧憬が強い説話集だが、この中にも
三百五十年も昔の宇多上皇の宮瀧行幸に関
する記述がある。さらに室町時代の伏見宮
貞成親王の日記『看聞御記』にも、上皇の
行幸が話題になっていたことが記されてい
る。

時代が下って江戸時代に入ると、大和
の最初の地誌『和州旧跡幽考』（林宗甫撰

一六八二）、貝原益軒の『和州巡覧記』
（一六九六）、本居宣長の『菅笠日記』
（二七七二）、上田秋成うえだあきなりの『秋成遺文』しゅうせいいぶん（十八世紀末）など、多くの地誌、紀行文などに、古くから宮跡伝承のある宮瀧を訪ね、その景観を称える記録が残されている。

宇多上皇以降、都の貴紳たちがこぞつて宮瀧に憧れを抱いた背景には、そこが『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』、『懷風藻』に記された吉野宮、吉野離宮の故地であると強く意識していたからであろう。

二 宮瀧遺跡の調査と研究史

宮瀧遺跡の本格的な発掘調査は末永雅雄博士によって始められたが、その末永先生が私に言われたことがある。それは宮瀧遺跡の研究史について語るときに決して忘れてはならない人達のことだった。まず最初に挙げなければならないのは、早くも明治二十年代にこの地をしばしば訪れて土器や石器を採集されていた、旧高見村在住の木村一郎氏である。その後東京に出られた木村氏は、歴史学者の喜田貞吉博士のもとを訪ね、宮瀧Ⅱ吉野離宮説を提唱されたよう

と宮瀧在住の今西清兵衛氏から直接伺った話として、心にとどめておくようにと言われた。

明治時代の終わりから大正時代の初めにかけて活躍されたのが、吉野町樫尾の人で、郷土史、郷土教育に力を注がれた山本源次郎氏である。山本氏は『中荘村附近史蹟考案』、『大字宮瀧史蹟材料集』の二編の記録を残されている。氏は志半ばで故人となったが、その遺志を継がれたのが、同じく吉野町出身の、教育者であり郷土史家の中岡清一氏だった。

中岡氏は文献と遺跡の両面から調査を進め、昭和二年（一九二七）以来、宮瀧で小規模な試掘調査を行い、須恵器や石敷き、礎石などを確認し、宮瀧遺跡の重要性を提唱した。さらに飛鳥地域の石敷きとの共通性なども検討し、昭和四年（一九二九）九月に行われた奈良県史蹟調査会で報告し、発掘調査の必要性を説かれた。宮瀧遺跡研究の実質的な基礎を築かれた中岡氏の業績は『大塔宮吉野城』の大著になって、今もなお私たちに大きな影響と刺激を与え続けている。

中岡氏の報告によって、宮瀧遺跡の重要

性を再認識した奈良県史蹟調査会では、早速調査会委員の岸熊吉技師を派遣し、遺跡全体を把握する調査を実施し、翌五年（一九三〇）九月の調査委員会で報告された。

岸熊吉氏の報告の翌十月から宮瀧遺跡の本格的な発掘調査が始まったが、その担当者とは当時京都大学考古学教室に席を置かれていた末永雅雄博士だった。石舞台古墳、唐古遺跡など、重要遺跡の調査が始まる数年前のことだったが、調査は昭和十三年（一九三八）までの八年間におよび、多くの成果をあげ『宮瀧の遺跡』としてまとめられた。

発掘調査のきっかけは、宮瀧遺跡と吉野宮、吉野離宮との関係を知ることであったが、調査の過程で、この遺跡が縄文時代後期から弥生時代中期までの、複合遺跡に重なることが明らかになった。しかし本文ではそのことには触れないで先に進む。

中岡清一氏の指摘された通り、吉野川河岸の台地上には飛鳥京に共通する石敷きや小規模な礎石建物、土師器、須恵器などの遺物に混じって奈良時代の軒瓦なども出土

し、ここに歴史時代の重要な遺構群が存在することが知られた。しかし、末永先生の調査報告の結論は、「この地が吉野離宮の跡地と断定する資料は得られなかったが、その説を否定することは出来ない」という慎重な意見で結ばれている。

三 昭和五十年(一九七五)年以降の調査

昭和十三年以降発掘調査が行われていなかった宮瀧の地に、発掘調査のメスが入ったのが三十七年後の昭和五十年一月のことだった。新たに建設される幼稚園の工事に伴う発掘で、調査の結果は、遺構の検出はなくわずかな土器片が出土したのみだったが、この調査をきっかけにその後国庫補助金を得て「宮瀧遺跡範囲確認調査」が行われるようになった。

末永先生の調査を第一次調査とし、その後小規模なトレンチ調査も含めて、調査ごとに番号を付けて行っているが、もう五十次を越えた。しかし調査面積は、推定遺跡範囲の約六分の一の七千平方メートルである。今後新しい成果が得られることを期待したいが、現在までの調査結果から考えられることを述べておこう。

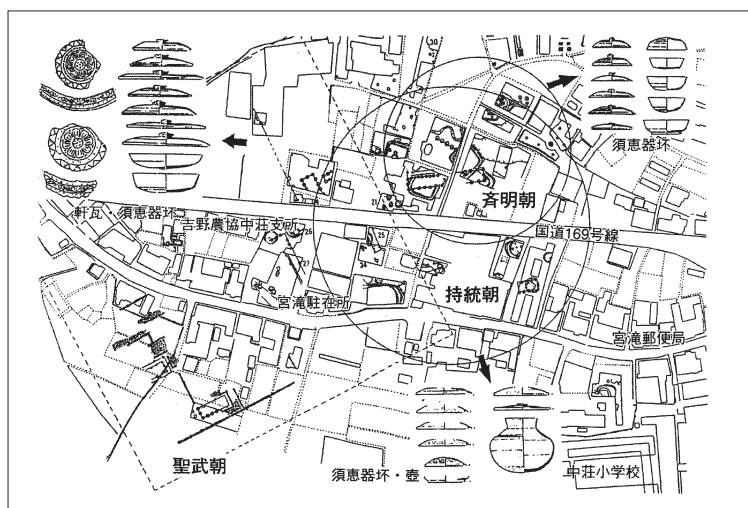
私が宮瀧の発掘調査を始めた頃、最初に戸惑ったことがある。それは地表面から四〇(五〇センチメートル)掘り下げると、ほぼ同じ面で弥生時代と飛鳥・奈良時代の遺構が現れることだった。普通であれば時代を経るごとに土層は堆積し、古い遺構の上層に新しい遺構が存在するが、ここでは違っていたのだ。それは地形測量と詳しい現地検討から検証できたが、ここでは奈良時代に大規模な土地の造成が行われていたのである。つまり山側に近い北方は削平し、川に近い南側は盛り土を行い、広い平坦地を造り、その中に建物群を配置していたようだ。その時期が奈良時代前半と考えられる。

飛鳥時代以降の遺構は大きく四期に区分できる。第一期は七世紀中頃、第二期は七世紀後半、第三期は八世紀前半、第四期は九世紀末から十世紀初頭とみて良い。

しかし私が特に注目しているのは、第三期の建物の柱穴から五世紀後半(古墳時代)の須恵器甕の破片が数点出土したことである。もちろんこの土器に伴う遺構は見つかっていないし、あったとしても奈良時代の造成工事で失われている可能性も強い。しかし、この吉野の奥地に偶然にこの時代

宮瀧遺跡検出遺構

(吉野町『憧憬・古代史の吉野』より1992年)



の土器が混入したとは考えがたい。そこで思い起こされるのが『日本書紀』の雄略紀の二年と四年に見られる吉野宮の記事である。そのことについては後で触れよう。

まず第一期の遺構は台地の中心よりやや

東よりにある。中島を持つ池を中心とした庭園遺構と、近くには柵列と小規模な建物が見つかっている。また池の北側の高い場所には、池への給水施設と見られる長方形の土坑もあった。桜井市上宮遺跡や明日香村島庄遺跡で確認されている遺構に近似したもので、この遺構の下層にはこの台地で唯一の伏流水の水脈が存在する。おそらくこれらの遺構は、宮瀧で行われた水に

関わる祭祀に関連するものであろう。出土遺物は人為的に周囲を打ち欠いた多くの須恵器坏蓋のほか、給排水に用いたと見られる鰐付きの大型土管などが目立った。第二期の遺構の場所は第一期とほぼ重なるが、西南に広がり散在的ではあるが、掘立柱建物も見られる。遺構に伴う遺物は多くはないが、第三期の遺構、遺物に混じるものが見られる。

第三期の建物群は、台地の中央から西よりにかけて、一辺約一八〇^{メートル}の方形区画の中にある。ここからは平城宮に用いた瓦に近い二種の軒瓦も出土し、石敷きを伴う掘立柱建物が確認されている。興味深いのは建て替えの痕跡がなく、また土器も平城Ⅱ期（八世紀第2四半期）のものがほとんどで、存続期間は限られるようである。

第四期は、宮瀧の台地のほぼ中央部で小



宮瀧遺跡44次調査（上空より）
（奈良県立橿原考古学研究所より提供）



池跡に投棄された土器



第41次掘立柱建物（南より）
（奈良県立橿原考古学研究所より提供）

規模な礎石建物が一棟検出されている。この遺構は第一次調査でも注意されていたものであるが、第三十八次調査で再発掘し、時期が明らかになった。自然石の礎石の根石に混じって平安時代前期の黒色土器が出土したことから、さらに下層から第三期の柱列を検出したことにより、宮瀧遺跡の古代の遺構では最も新しいものであることが判明した。

四 文献に見える吉野宮・吉野離宮

吉野宮が文献に初めて登場するのは、『記・紀』の応神天皇の時である。「吉野宮に行幸した天皇に、国^く栖^ず人が来朝し酒を献じた」という内容であり、応神天皇十九年のこととしている。

次に見えるのが雄略天皇で、『日本書紀』によると二年冬十月と、四年秋八月に二度吉野宮に行幸している。四年の記事は「秋^{あき}津島^{つしま}」の地名起源説話として有名であるが、多くの古代史研究者はこの二人の天皇の吉野宮の存在には懐疑的である。

『日本書紀』には斉明天皇が二年(六五六)に吉野宮を造ったことが記され、三年後の五年(六五九)三月に行幸し、トヨノアカ

リ(大宴会)を開いている。もともと稲作とかかわりのある儀式であるトヨノアカリを吉野宮で行ったことは、おそらく春三月を期してその年の豊作を祈ったのであろう。

吉野宮が歴史上クローズアップされるのは、大海人皇子が壬申の乱の挙兵の地に選んだことだろう。母である斉明天皇の宮であることに加えて、この吉野が神仙の住む場所であると信じられていたことも関係あるだろう。壬申の乱に勝利した武明天皇となったのち、皇子たちを伴い、六年後の天武八年(六七九)にここでいわゆる「吉野盟」を行ったのも同じ理由からだろう。

天武天皇の後を踏襲した持統天皇は、夫とともに一時期を過ごした吉野宮に、三十一回、即位前後の三回を加えると実に三十四回も訪れている。中でも持統七年(六九三)と九年(六九五)には年間に五回も吉野宮に行幸されている。私はこの行幸と持統八年の藤原宮への遷宮との間に何らかの関わりがあるのでは、と考えている。また多くの訪問は斉明天皇と同じく、吉野の水神に五穀豊穡を祈願するための、重要な祭祀を行うことが大きな目的であったと

みて良いと思っている。

文武天皇、元明天皇の行幸も『続日本紀』には記されているが、最も注目すべきは、神亀元年(七二四)年に皇位を継いだ聖武天皇が、即位後まもなく芳(吉)野宮に行幸し、その後芳野と和泉の監^{げん}(国に準じた行政機構)で干ばつに苦しむ民のために、雨乞いを命じたことが天平四年(七三二)のこととして記されていることである。また天平八年(七三六)六月二十七日から七月十日までの約半月間、芳野宮に滞在し、監や近隣の民に品物を下賜している。

この時の行幸については、近年平城京の藤原麻呂^{ふじわらまろ}邸の近くの溝から出土した四点の木簡によって裏付けられた。

文献に記された吉野宮の変遷をたどってみると、それが一連の施設ではないという思いが強くなり、この文献の宮の変遷と、発掘調査で明らかになった四期の遺構との間に深いつながりがあるのでは、と考えるようになった。

五 発掘された遺構と吉野宮

宮瀧の台地に広がる飛鳥時代以降の遺構群は、四時期に分けられることは先に述べ

たが、先ず第一期が、斉明天皇の宮に相当すると考えられる。台地の中央やや東よりを中心とする庭園遺構や導水施設からは、はるか南に喜佐谷を越えて青根ヶ峰を望むことができる。この山は別名水分山と呼ばれ、吉野連山を象徴する山である。斉明天皇はこの山を望む場所に人工池と導水施設を作り、水辺の祭祀を行ったのであろう。

第二期が持統朝の宮と考えられる。第一期と重なる部分が多いが、西南に広がり、建造物が散在している。基本的には前代の池を中心とした場所を踏襲していることから、同じく水に関わる祭祀が行われていたのだろう。面積の割合には遺構が少ないが、かえってそのことが、祭祀性の強いこの宮の性格を物語っているのかもしれない。またこの時期以前の遺構は、第三期の大規模造成によって改変されていることは先に述べた通りである。

第三期の遺構群が最も遺存状態が良く、石敷きや石溝、その間に建つ掘立柱建物などで構成されている。またこの遺構群の中心は、第一、二期の中心から約六〇メートル西に移動している。このことは現地に立てばすぐ理解できることだが、周囲の景観が大き

く変化するのである。つまり今まで重要であった青根ヶ峰が視界から消え、吉野川を隔てて、神南備型の象山が正面になるのである。この時点で斉明・持統朝に行われていた祭祀は大きく変化したと思われる。

第三期の建物は建て替えもなく、土器、瓦ともに八世紀第二四半期の短い期間に限られることから、この遺構群は聖武朝の宮、さらに芳野監の役所も兼ねた建物群の可能性が強い。

第四期の遺構は現在のところ礎石建物一棟のみである。しかし、この位置は第三期の遺構群の中心近くにあり、その建造時期から見ても、これが宇多上皇の昌泰元年（八九八）に行幸した際の行宮の一角である可能性が強いのでは、と私は考えている。もしそうであれば、宮瀧が吉野宮であるという最も有力な根拠になるだろう。さらに、宇多上皇は二年後の昌泰三年（九〇〇）に大峰山に入峰したことが『金峯山草創記』に見える。

中世以降の成立であるため、あまり重要視されてなかった史料だったが、昭和五十九年（一九八四）以降の大峰山寺本堂地下の発掘調査の結果、宇多上皇が入峰し

たという信憑性が高まってきた。

宮瀧は古代には吉野山の登山口に当たっていたが、宮瀧を訪れた上皇は、ここから青根ヶ峰を望みながら、大峰山の山上ヶ岳への登峰を思ったのではなからうか。

ここで同じく礎石建物近くの第三期の柱穴から出土した、五世紀後半の須恵器大甕



宮瀧遺跡と象の中山・喜佐谷（左の谷）
（奈良県立橿原考古学研究所より提供）

片についても触れておかなければならない。それは、先に述べた『日本書紀』の雄略紀に見られる吉野宮と関わるのではないかと、と思うからである。言うまでもなく雄略（倭王武）の時代、いわゆる「倭の五王」の時代には、中国の南朝から様々な技術や文化がもたらされた。その中には「風水思想」とともに不老長寿を願う「神仙思想」も含まれていた。

私は、斉明天皇がこの地に宮を営んだきっかけは、二百年前に新しい思想に基づいて雄略天皇が開いた吉野宮の存在だったのでは、と考えている。

六 吉野の持つ意味

奈良時代になると、吉野は神仙境として都の貴紳たちのあこがれの地となったことは、『懷風藻』の中の次のような漢詩の中に強く表れている。

駕^がに吉野宮に従う 詔に応ず 大伴王
張^{ちやうけん}鸞^{らん}が跡を尋ねまく欲^ほり 幸^{さいわ}いに逐^おう河
源の風

朝雲南北を指し 夕霧西東を正す
嶺^け峻^{けん}しく絲^し響^{きやう}急^{きやく}く 溪^{たに}曠^{ひろ}くして 竹^{ちく}鳴^{めい}
融^とる

将に 造化^{ぞうか}の趣を歌わんとして 素を握^とりて不工^{ふこう}を愧^はず

（筏に乗って黄河の源流を尋ねた張鸞にならって、天皇の行幸に従ってここ吉野川の源にある吉野離宮にやってきた。朝雲は南北にあり、夕霧は西東に流れている。吉野の峰は険しく、かき鳴らす弦琴の音も急を奏して、吉野川の谷は広く、竹笛の音は良く通る。

まさに自然の神の造られた、この吉野の素晴らしい趣を歌にしようと思ひ筆を執ったが、詩才のない自分が恥ずかしいことだ。）

このように、吉野は日常の生活とは全く異なつた世界、神仙の住む世界と認識されていたようだ。そこはまた再生、つまり蘇りの可能な空間としても捉えられていた。大化のクーデターの後、身の危険を感じて吉野に入った古人大兄皇子、満を持して吉野宮で半年を過ごした大海人皇子、時代は下って十四世紀、後醍醐天皇によって開かれた南の朝廷もこの吉野に置かれた。都からはるか南の奥深い吉野に、時代を越えて再起を願った権力者が向かった背景は、地理的に見れば中央構造線沿いに流れる吉野

川が天然の濠となり、背後に広大な山並みが続く難攻不落の城砦と見ることもできよう。しかしそれにも増して、上流にダムが造られ、水量も大きく変化したが、今も宮瀧を流れる吉野川の景観は素晴らしい。

昭和五十九年（一九八四）の秋、末永先生の『宮瀧の遺跡』の復刻の話が進み、私がお手伝いすることになった。橿原考古学研究所での仕事を終えたあと、南河内の狭山にある先生のお宅に通い、先生のお人柄に親しく接しながら、二人で仕事をさせていただいた数カ月間は、私にとってかけがえのない時間だった。そんなある日、先生が仕事の手を休め私にこう言われたのだ。「わしは今まで宮瀧が吉野離宮とは言うたことはないけど、君は言ったらいい、もう言うてもええやろ」。

最初は驚いたが、あの慎重な先生が私の持論を認めてくださったという思いが込み上げてきたことを、今も鮮明に記憶している。宮瀧遺跡の調査は今後も続けられるが、律令国家の礎を築き、日本の国号を定めた天武天皇の政治の出発の地である吉野宮の跡地を少しでも多くの方が訪ね、この国の歴史を考えていただきたいと願っている。